届け 世界の果てまでも

令和５年２月１０日　Ｎｏ．６５　文責　校長　飯久保一男

素直さ・謙虚さ ⇄ 反抗する・心を閉ざす

私は，これまで勤務した学校の教職員からは「究極の負けず嫌い」とよく言われました。運動会の色別対抗をはじめ，ちょっとした勝負ごとなどでも勝敗や順位が関わるものには，つい熱くなってしまいます。

この「負けず嫌い」という言葉には，いい意味も悪い意味も含まれます。

ミニバス指導歴３０年
正義を味方します。

【いい意味として】

〇勝つために力を発揮できる。　〇負けたくないので必死に努力する。

【悪い意味として】

▽協調性がなく自分勝手。　▽虚栄心が強く，プライドが高い。

などがあげられます。

トップアスリートと言われるスポーツの選手は，例外なく「負けず嫌い」です。しかし，負けず嫌いというだけでは乗り越えられない壁に，どんな選手も突き当たります。その壁を乗り越えるための最も簡単な方法は，監督やコーチなどの指導者の指導やアドバイスを受けることだと思います。

その指導やアドバイスの受け取り方によって，その選手が壁を乗り越えられるか，そこで停滞してしまうか分かれるといいます。それには「素直さ」「謙虚さ」が関係します。監督やコーチが指導やアドバイスをしても反抗するような態度では，たとえ適切な指導やアドバイスであったとしても，その選手には有効なものにはなりません。また，監督やコーチの指導やアドバイスにいちいち反抗していたら，スポーツをするにあたって大きな敵となる「ストレス」を常に抱えることになってしまいます。

もらった指導やアドバイスに対して

▼ 聞く耳をもたない，従わない　…反抗「うるせぇなぁ」

△ 一応聞いておくけど，やろうとしない　…失礼

〇 信じてやってみる　…素直

また，もらった指導やアドバイスに

▼ 反応しない，無視する　…心を閉ざす「かまわないで」

△ 「知ってます」「やったことあります」など一言多い　…失礼

〇 「ありがとうございます」と感謝の気持ちをもつ　…謙虚

など，受け取り方によって，力を伸ばすことにつながるかどうかが分かれます。

世界チャンピオンになれる選手はわからないが，なれない選手ならわかる。
周囲に不満をもつ選手は，
どんな素晴らしい素質があってもチャンピオンには絶対になれない。

大橋 秀行（元プロボクサー・世界チャンピオン）

大橋さん（写真左）は，現ボクシング世界チャンピオンの井上尚弥選手（中央）の所属ジムの会長でもあります。

さて，裏面のことを大人（親や教師）と子どもの関係で考えてみます。

大人が指導やアドバイスをしたとき「素直に」「謙虚に」受け入れてくれる子どものほうがたくさんいます。

しかし（特に思春期の子どもは）大人が話しかけるとうるさがったり，反抗的な態度をとったりする子どももいます。その姿や態度はその子が本気で反抗しているように感じますが，実は，その場に友達がいるので，あえてそういう態度をとっているということも多いものです。個別に話をしてみると話し方まで変わる子も多くいます。大人をバカにしたような態度をしていても，まだまだ子どもなのです。

思春期の子どもは，大人の本心を探ります。自分たちを理解した「ふり」をする大人のウソは見破ります。自分たちを見て，自分たちのことを考えて，話したり注意したりしてくれる大人でないと信頼してくれません。子どもたちに寄り添って，子どものことを本気で考えてくれる大人の気持ちは，「自分たちのことを考えてくれている」と必ず伝わるはずです。でも，それが分かっているのに反抗してしまうのも，思春期の特徴です。

そして，反抗するのではなく，自分の殻に閉じこもり，心を閉ざしてしまう子どももいます。こういう子どもの心を開かせ，大人の本心を伝えることは難しいことです。時間はかかるかもしれませんが，その子に正しいことを伝えているのであれば，自信をもって伝え続けていくことが大切だと思います。そういう子が心を開いてくれたら，信頼はより強いものになります。

子どもに寄り添い，子どものことを本気で考えることが第一歩です。

強くならない子は，自分の心を閉ざしてしまっている。
いくら私の経験で強くなるように指導してあげても，
扉を閉めているから入っていけないのだ。

小出 義雄（長距離・マラソンの指導者）

オリンピックマラソンの金メダリスト高橋尚子さんを育てたことで有名な小出さんは，ほめて育てることで有名な指導者ですが，その小出さんであっても，心を閉ざしている子への指導は難しいと語っていました。

◆◆◆◆◆◆◆　　◆◆◆◆◆◆◆

…同僚曰く「究極の負けず嫌い」の私ですが，運動会の取り組みなどは，子どもたちの主体的な活動とすべく，事前指導と事後指導を丁寧に行い，練習の場では，我慢をして，あえて指導をしないようにしていました。

運動会の全校種目では，色組が勝つための作戦を６年生の子どもたちと一緒に考えたり，ポイントを絞った練習の内容を考えたりしてきました。練習の主体は子どもたちですので，６年生との事前の作戦会議では口を出すこともありましたが，練習のときは口を出さず見守ることに徹します。思春期の子どもは大勢の前で注意されることを嫌がります。事前に指導をしたり話し合いをしたりして練習の内容が確認されていれば，６年生の子どもたちを信用して任せます。私が６年担任で色組の責任教師のときは，同じ色組の教員メンバーにも，練習中は黙って見守ることをお願いしてきました。毎回の練習が終わった後に６年生との話し合いの会をもち，６年生だけのときに，もっとこうしたほうがいいというアドバイスをしてほしいとお願いをしました。

こういう取り組みは始めはじれったいものです。６年生がもたもたしていたり，声が小さかったり，事前に確認した練習とは違ってしまったりします。しかしその場は我慢です。練習と反省を繰り返すうちに，うまく練習ができるばかりか，自分たちの力でやっているという自覚や，色組の教員との信頼関係も生まれてきます。

その結果，勝てたとなれば，子どもも教員もうれしさ倍増です。６年生たちは，自分たちの力で勝てたことを喜びます。逆に勝てなかったときは，６年生から下級生に自然と「私たちがもっといい作戦を考えていれば勝てたのにごめんなさい。」という声が出てきます。運動会後の色組の反省会で，下級生から「６年生たちがいろいろな作戦を考えてくれて，負けてしまったけど楽しかった。ありがとう。」などの感想が出ると，こうやって取り組んできた６年生の目からは，涙がこぼれます。